

平成21年度2月 品川区学力定着度調査

小中連携による学力向上に向けた取り組み結果の公表

目 次

1 7年生の調査結果等から見られる5～7年生の課題

- (1) 日野学園7年生の結果から見た5・6年生の課題（国語、算数・数学共通）
- (2) 区内7年生全体の傾向を踏まえた分析、課題の明確化（国語）
- (3) 区内7年生全体の傾向を踏まえた分析、課題の明確化（算数・数学）

2 課題に基づいた5～7年生の目標

- (1) 今後の指導・対策の目標（国語）
- (2) 今後の指導・対策の目標（算数・数学）

3 課題解決のための方策

- (1) 基本方針
- (2) 具体的な対策

1 7年生の調査結果等から見られる5～7年生の課題

(1) 日野学園7年生の調査結果から見た5・6年生の課題（国語、算数・数学共通）

国語、数学とも半数以上の設問が、習熟基準を上回る正答率であり、全体的には定着状況は良好であるといえる。概ね良い結果をあげているので、現在行っている学習は引き続き指導を重ねていく方向でよい。その一方で、習熟基準を下回る正答率の設問が40%程度あることから、その部分については重点的に改善・対策をしていき、どの時期にどのように指導していくかについて考える必要性が明らかになった。

(2) 区内7年生全体の傾向を踏まえた分析、課題の明確化（国語）

漢字では、「読み」は概ね習熟基準を上回っている。しかし「書き」は、形をしっかりと覚えていないと書けないような漢字の正答率の低いことが、区全体または日野学園の調査結果から明らかになった。

文学的文章の読み取りに関する内容（表現の特徴・登場人物の描写）、説明的文章の読み取りに関する内容（文章の展開に即した内容把握）などは、ほぼ習熟基準と同様という結果が出ている。

習熟基準を大きく下回った問題としては、言語事項に関する内容の「敬語の使い方」や「四字熟語」があげられる。特に、敬語の使い方についての定着度が低く、漢字の書きと併せて日常生活の中で使用頻度の低いものをいかに定着させていくかが課題となっている。

論理的な思考力が必要な活用問題では、まずモデルパターンにしたがって書くことが求められる。目的意識や相手意識をもち、説明文や意見文等を明確な構成で書くことができるように継続した指導を行うことが課題である。

(3) 区内7年生全体の傾向を踏まえた分析、課題の明確化（算数・数学）

「数と式の意味と計算」の内容の多くは区の習熟基準を上回り、定着していると考えられる。しかし、「小数×小数の乗法」の計算や「速さと時間から道のりの関係を表す不等式」を選択したりする問題が下回っており、区の全体的な傾向と似た結果となった。同様に「数量関係」でも「2つの量が比例する関係」や「与えられた比例の式を満たすグラフ」「X、Yの値から反比例の式」を選択する問題などは定着度が低く、日常の中にある数量関係を数学的に捉えることが苦手な傾向が見られる。「図形と計量」については、図形の内角を求めたり、面積・体積を求めたりする問題は習熟基準を上回っていたが、立体の展開図や投影図に関する問題は課題がみられた。空間における立体の辺や面の位置関係のよみとりを丁寧に指導していく必要がある。

2 課題に基づいた5～7年生の目標

(1) 今後の改善・対策（国語）

・書き誤りやすい漢字については、授業の中で意図的に取り上げ、注意を促し確認する指導を行う。また、既習のものも含め、繰り返し漢字を書かせる指導を徹底し、確実に身に付けさせる。さらに、例文や作文の中でも、辞書を用いながら積極的に正しい漢字を活用させつつ、語彙力を育成する指導も継続的に行うことで、漢字を書く・用

いる力を伸ばす。

- ・ 1年から7年まで「漢字ステージ100」を利用した学習によって、漢字の正しい形や筆順、語例や例文による語彙理解、作文への活用等の指導を行い、弱点補強をする。
- ・ 8・9年、特に8年への指導については、必修授業及びステップアップ学習Ⅰでの指導を継続的に行い、正しい漢字を繰り返し書くことによって、漢字の力を補強する。
- ・ 文法や語句の知識については、「文法」や「言語」の分野で指導するだけでなく、読解指導や作文指導で積極的に取り上げ、日常の会話においても正しく使用できるよう、繰り返し確認する。
- ・ キーワードに注意しながら読み、文章構成を理解させる。また、問題の条件（何文字以内や、「～から」などで終わるなど）に合わせた解答の仕方を理解させることも必要である。読解指導だけではなく、作文やスピーチにおいても論理的に説明させる学習を行う。
- ・ 授業の中で、原稿用紙を用いて短い作文を繰り返し書かせることで、総合的な文章力を養い、自分の伝えたい事柄を明確にし、具体的に表現できるよう、指導を行う。接続詞を巧みに使い、滑らかな文章を作るコツや、文末表現を工夫し論理的な文章を組み立てるコツを段階的に指導していく。

（2）今後の改善・対策（算数・数学）

「小数の計算」や「速さの問題」は、毎年子どもたちが苦手とする単元である。克服するために、放課後等を利用した個別指導と反復練習を強化していく。個別指導は、授業内だけでは定着できない児童・生徒を中心にを行い、その日の授業の内容はもちろん、既習学習についてもまだ習得できていない部分までさかのぼって指導していく。反復練習として、算数演習の時間を有効に活用していく。習ったときには解けた問題も、しばらくやらないうちに忘れてしまうので、繰り返し復習させることで定着させていく。

さらに、日常の中にある数量関係を数学的に捉えることが苦手なので、授業の導入や文章題の際に具体的なものを使い、実感をもたせて考えていけるように工夫していく。算数・数学が不得意な児童・生徒は、どうしても苦手意識が強くなってしまっているので、実際の生活に結びついていることや、解ける喜びが実感できるよう指導していく。

3 課題解決のための方策

（1）基本方針

小中一貫校として、小中一貫教育カリキュラムに基づいて9年間の学習活動を通して、基礎基本の定着と応用力を高めていく。まず、1～4年は、基礎基本の定着を徹底させる。次に、5～7年では、一貫校の特色でもある中学校の教員による教科担任制をどの教科にも導入し、専門性を生かした指導によって、基礎基本のさらなる定着と発展的な学習の基礎となる力を付けていく。さらに、8・9年は、基礎基本を確実なものとし、発展学習に取り組む態勢を構築していく。

また、豊かな人間性を身に付け、社会力を育むために、市民科の授業を充実させると

ともに、学級・学年での活動、小中一貫校ならではの異学年の活動、学校行事などを実施することで、多面的な学力と豊かな心を育てていく。

- ・小中一貫教育カリキュラムの実施と教科担任制の実施。
- ・都・区講師の適正な配置と活用。
- ・ステップアップ学習Ⅰ（根っこの時間）による基礎基本の定着。
- ・習熟度学習、少人数学習、個別学習等様々な学習形態の展開。特別支援教育の推進。
- ・家庭学習の推進と自学自習の体得
- ・小中一貫校の特色を最大限に活用し、豊かで多面的な学力と豊かな心の醸成。

これらの、基本方針は、本学園が5月に公表した「平成21年度2月実施 学力定着度調査の結果」と同じである。今回、連携している御殿山小学校、第一日野小学校、第三日野小学校と本校の4校検討委員会でこの方針を確認し、さらに進めていくということになった。

（２）具体的な対策

○小・中連携校で一致して取り組む内容

4校検討委員会で、学力定着・向上について、継続して協議・検討を行う。

合同研究会で各校の実態の話し合いを踏まえるだけでなく、合同の意識調査、合同研究授業を通して、共通の取り組みを行うように実践を進める。

特に、学力に直接関係する国語、算数数学では、指導方法、指導内容を明らかにし、共通して行う部分と、学校独自に特色を出す部分とに分けて、以下のように、学力定着・向上を目指す。

・国語

漢字力の定着度をあげるための手立ての工夫・実践報告を行う。また、漢字ステージの4校同一の共通定着度調査問題を作成し、1年～6年を対象に12月実施し、分析を2月までに行い、検証とともに学力の定着を図る。

・算数数学

つまずきやすい学習内容や最重要指導項目を基に、4校同一の共通問題を作成し、1年～6年生を対象に1月実施し、分析を2月までに行い、検証とともに学力の定着を図る。

○日野学園で取り組む手立て

・ステップアップ学習Ⅰ（根っこの時間）における基礎基本の徹底

基礎基本の指導の中で、学力調査では、正確さに欠けることが指摘されている。その点を改善していくように、各担当者も十分配慮し、指導していく。1～9年すべての学年において、毎日の20～30分間の小刻みな学習の積み上げによる基礎基本の徹底を図る。

1～4年は、根っこの学習として、毎日30分設定し、国語・算数・英語の指導を行う。国語では、漢字の読み・書き、算数では基本的な計算を繰り返し学習する。英語では歌やゲーム、英語の本の読み聞かせなどを通して、児童に興味関心を持たせる意識付けを中心に行う。

5・6年では、ステップアップ学習として、毎日20分設定し、引き続き国語・算数・英語の3教科を実施し、基礎基本の定着を図る。

7年では、5教科について、小学校での学習の基礎基本を振り返って学習すると共に、すべての教科の基礎基本を徹底させていくようにする。

8・9年においては、5教科の中から、生徒が自分で2教科を選択し、不得意な教科の克服を目指すことに重点を置く方法や得意な教科を確実に定着させることをねらいとして、学習ガイダンスを通して自主的に選択し、学習を進めていく。

・特別支援教育も含めた多様で個に応じた学習形態の導入と授業の改善

児童生徒の学習の状況・学習内容に応じて、習熟度別学習、少人数学習、ティームティーチング、個別学習指導など、様々な学習活動を展開し、一人一人の学力を向上させていく。また、非常勤講師や習熟度別学習対応指導助手を活用し、さらに、きめ細かな指導の体制をつくっていく。

・家庭学習の推進と自学自習の体得

学力向上と自学自習の体得を目指し、全校体制で家庭学習を推進していく。家庭学習の手引書を各学年作成し、全家庭に協力を仰ぐようにした。家庭学習の手引書には、時間の目安・学習内容・家庭学習のポイントなどを分かりやすく明示し、9年間を通して自学自習する力を身に付けさせるようにする。

・小中一貫校の特色を最大限に活用した教育活動による学力の向上

本学園では、小中一貫校の良さを生かした教育活動を展開する。すでに前年度から実施しているが、専門性を生かした中学校教員による5年生からの教科担任制を全教科で展開し、学力の向上を図る。また、一貫校では小中教員の共同体制で、1～9年間のきめ細かな指導を展開していく。

さらに、長期休業中の補習授業（サマースクール）に習熟度別学習を取り入れたり、学期中の放課後に学力補充の学習場面を設定したりして、個に応じた指導をする。

それだけでなく、1～4年ブロック、5～7年ブロック、8・9年ブロックでのまとまりを生かした学習活動を重視し、ブロックの教員がなお一層の連携を図る。